

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

宮下 遼

【所属】(助成決定時)

なし

【研究題目】

近世オスマン朝の文化的選良の社会生活と心性についての社会史研究

【研究の目的】(400字程度)

本研究は 16、17 世紀イスタンブルに集った軍人、官吏という支配階層と共に商工業者を内包した近世オスマン朝の「文化的選良」の実態を、社会生活と心性の二側面から明らかにするトルコ社会史研究である。申請者はこれを行うに当たり社会身分という社会制度的指標ではなく、詩作能力の有無という文化的指標による分類を採用し、文化的選良(the cultural elite)と庶民(the populace)という新たな分類項によってオスマン朝人士を再分類し、従来为社会史、文学(史)研究において十分に活用されてこなかった、詩集以外の文学作品を主史料とすることで、彼らの社会生活と心性を総合的に明らかにする手法を採用した。これは、物を書く行為が詩作とほぼ同義であり、韻文詩が支配階層に広く共有される教養、共通言語として機能し、韻文詩の献呈が立身出世のための重要な手段として機能したオスマン朝社会にあっては、詩作能力の有無が社会上層部、ないし上層部への立身を目指す者と、オスマン語美文を操りえない、また操る必要のない商工業者から成る都市の庶民という、文化的基調を異にする二つの集団に分かち得る普遍性の高い新指標となり得るからである。本研究はこの過程を通じて、国家制度の枠組みからでは窺い得ない文化史、文学(史)、政治エリート史研究という複数論題に跨るオスマン朝社会の実態解明を企図した。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究はⅠ.「文化的選良の社会身分と人的社会結合」①「文化的選良の社会身分」、②「イスタンブル文壇における人的社会結合」、およびⅡ.「文化的選良の心性」③「文化的選良の生活意識」、④「庶民の心性の共有」の二段階四過程から成る。これは、基本的に官職保持者に限定された支配階層に留まらない詩作能力を有した人々の範囲を正確に規定し、その社会的実態を理解した上で、そこに種々の文学史料に映ずる彼らの道徳観、差別意識等を対置した方が、より明確に彼らの実態と心性を解明しうるからである。本研究では、ここでは 16、17 世紀の詩人列伝を主史料としつつ、選良たちの出身地、職業等の経歴をデータベース化することで、雑多な人間から成る文化的選良層の身分的構成を定義する。ついで②において、当時、韻文詩の主な献呈先であったイスタンブル文壇において選良たちの作品が実社会のどのような場面で献呈されたのかを把握し、彼らの詩歌に拠った立身出世の実相を解き明かす。研究にあたっては王朝貴顕主催の公式行事や祝祭というフォーマルな空間と、ほとんど実態解明が行われていないメジュリスと呼ばれたインフォーマルなサロンの二つの観点から、詩作行為の社会的機能を検討する。そして③の目的は、文化的選良たちの心性を紳士意識と差別意識という密接に絡み合った二つの意識構造の検討を通じて解き明かすことにある。オスマン朝で盛んに著された礼儀作法を説く助言の書史料のうち、17 世紀の『誉の書』、『寛容の書』といったその代表作と、そこに記された選良の在るべき姿である雅人(zarif)としての心構え、および実際の慣習行動を通じて彼らが理想とした紳士像を比定する。他方で④ではイスタンブルという生活空間を庶民と共有した文化的選良たちの一都市住民としての心性を解明する。これに際しては、

特にアヤソフィア創建伝説やイスタンブル征服伝説、あるいは同時代の有名な狂人のような作者の階層の上下、韻文散文の別を問わずに広く記録される伝説、俗信の存在に注目する。以上の四研究項目を達成したのち、総合的なオスマン朝文化選良論の構築を目指す。

【結論・考察】（400字程度）

本研究を通じて申請者は、一方で祝祭に際して「お情け」と呼ばれた下賜金で報いられる反面、政府の公的な官職として「詩人」が存在しない点は、詩作と言う営為があくまでインフォーマル・セクターに属する職能であったことを指摘しつつ、他方で詩人たちの伝記研究を通じて、実際の能力に見合わないような官職（法官など）を、詩の献呈によって得るものなどがいた実例を引き、公的官職ではないとはいえ詩人という「職能」が立身、およびコミュニケーションに大きな役割を果たしていた点を明らかにした。その上で、彼らの心性を研究し、従来研究では都市商業の立役者として評価されてきた商工業者が、文化的選良の間では雅人としての自らに比して「卑しい者」というある種のトポスの対象となり、繰り返し批判され、あるいは嘲笑されていたという民衆蔑視観の存在を明らかにした。さらに庶民の心性を窺うべく俗信に着目すると、これはイスタンブル征服以前の時代にまで遡るような異教的な内容を含み、民衆によってかなり広く受容されていたことが詳らかになった。そして、文化的選良層の書き記した史料にもこれらの俗信はごく少数では見いだされたのであるが、その反面、多くの選良たちがこれを無視している事実は、彼らが庶民的な俗信をわざわざ書き記すべき対象とは見做していなかったことを示唆している。ここから窺えるのは、オスマン朝社会における選良層と庶民の文化的、意識的乖離である。以上の研究項目を経て、申請者は互いに乖離した生活意識を保持しながらも、しかしそれらがいずれかによって淘汰されることはなく、近代まで持続した点を結論としつつ、その好例として帝都イスタンブルがさまざまな都市像が並行的に存在する「多元的言説空間」であった点を実証した。